

「高松市まちかど漫遊帖」で 学生の町歩きツアーの企画実施

代表者 井上敬太（経済学部地域社会システム学科3年）

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、まちあるき案内人の経験を生かした地図を作り、無料で配布することで、商店街の賑わい創出の手助けをすることを目的としています。対象は、商店街の主な利用者とみられる、高校生～大学生の学生であります。以下は申請時のものを抜粋しました。

現在、高松市の観光施策の一環として「まちかど漫遊帖」が実施されています。その計画に、学生が案内する高松「学生の放課後うまいものツアー2010」を申請し、企画と事前調査を進めている段階です。香川県に住む人と県外から来る観光客を主な対象者とし、10月には3つのチームがそれぞれ1回街あるきの案内を実施します。この町歩きで調べたことを中心に、学生向けの市内の飲食店案内地図を作製し、配布する予定です。

2. 実施期間（実施日）

平成22年5月17日 から 平成23年3月中旬まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

このプロジェクト事業にとって、まず初めにまちあるきを成功させることが重要でした。まちあるきのコンセプトは「お客様に学生時代にタイムスリップしたような感覚を味わってもらおう」というもので、「食べ歩き」を通してその内容を補てんするといった内容です。

代表者は、まちあるきの案内人の、3つのチームをまとめるリーダーとして、5ヵ月間指揮を執りました。このプロジェクトが始動した当初、会議や活動日にメンバーが集まらず、集まってもやる気がないという問題に悩みました。何が原因か、自身の行動を振り返ったところ、リーダーだという責任感から仕事を1人で抱え込んでいて、各チームリーダーが機能していないことが分かりました。そこで、チームの目標を明確にし、無理のないよう仕事を分担したところ、次第にメンバーの協力が得られるようになりました。

そこで、まちあるき成功のために3つの工夫を行いました。

1つ目は七不思議の提案です。まちあるきの醍醐味は、そのまちをあるくことであり、

その際、ただ町並みを説明するだけでは面白みに欠けます。そこで、私たちの調査の際、興味を持った町並みや風景の中から7つを取りだし、それを七不思議として説明しました。

2つ目はリハーサルの徹底です。3つのチームがそれぞれ1回案内するのですが、それぞれのチームが不安なく、また、お客様目線で案内できるようにリハーサルを3回行いました。それぞれ案内人役とお客様役として役割分担し、案内の不手際がないか、タイムスケジュール管理ができているか、役割分担ができているかなどに注意しました。また、その反省をメンバー全員で共有し、新たに気付いたことは各チームのリーダーに連絡するようにしました。

3つ目は食べ歩きのメニューを柔軟に変更することです。リハーサルを通して考えた事ですが、10月に案内するということもあり、その日の天気や体調によって、食べられるものとそうでないものがあるのでは、と問題意識を持ちました。また、対象とする相手が香川県に住む中年層の方々だったため、出すメニューにも幅を利かせた方がよいと考えました。具体的な行動としては、カレー店で出す手作りできるアイスクリームを、カレーパンに変えることができるようにしました。

結果、定員を超えるお客様に喜んでいただけるガイドができ、メンバーにも喜ばれました。ガイド料を設定しませんでしたでしたが、ニーズを引き出す工夫をしたことで利益を出すことができ、ビジネスとしても成功を収めることができました。実際、アイスクリームとカレーパンの提案は好評で、「寒いから食べたくない」という意見や、「最後のラーメンが食べきれないといけなから、カレーパンとして持って帰りたい」という、潜在的なニーズをくみ取ることができていたと思います。

まちあるきの二次的なメリットも発生しました。先ほど取り上げたカレー店に通うようになった人が現れ、カレー店にとっても、私たちにとってもよい影響を与えられたと考えております。

さて本題の地図作成ですが、当初の予定よりも大幅なロスがありました。具体的には、時間と予算です。

当初の予定では、年内に地図印刷の前までの工程を全て終わらし、年が明けてから印刷に取り掛かり、配布するという計画でした。しかし、地図作成に関していくつか修正する部分が出てきたり、就職活動や公務員試験対策も本格的になってきた経緯があったことで、活動日に参加する時間がとれなかったりといった問題がありました。全員の授業がない日に時間を設けて活動をしましたが、結果的に2011年の2月の中旬に入って、初校が出来上がることになりました。

予算に関しては、10万円以上超過してしまい、稲田道彦教授の研究費から金銭的なお力添えをいただく結果になってしまいました。決められた予算内でプロジェクトを進行できなかったことが大きな失敗でした。

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより、具体的にどのように影響が出たかと、

言い切ることはできません。まちあるきに関しては、お客様が増えたというメリットがありました。まちあるきで関った人に幅広くよい影響が出たとは言い難いというのが現状です。

しかしながら、地図作成に関しましては、瓦町周辺の情報紙を作成しておられる、な夕書の藤井様に大変興味を示していただいております。地図が完成すれば、まちあるきに関った人やブリーザーズスクエアだけでなく、藤井様にも配布する予定であり、地図のよりよい活用方法や商店街への影響などを探っていこうと考えております。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

この活動を通して自己成長できたことが、何よりも変えがたい影響だと考えております。自分たちで目標を設定して計画し、仕事を分配させたり、相手の目線に立って提案したり、メンバーが同じ方向へ向かわせる配慮の仕方、つまり環境の整え方など、学ぶべき点は多くありました。ここで学んだことを学業やサークル活動の面でも大いに役立てられていると感じております

また、まちあるきでは、「他者に喜んでもらうために、何をするか」を考えながら行動することができるようになりました。地図作成でも、自分の仕事が終わっても他人の仕事を手伝ったり、全員がうまく仕事を運ぶことができるように、意識して行動したりしている人が増えたように思います。これはおそらく、「チームを意識した行動をすることが一番メリットになる」ことを自覚しただけでなく、「他者に喜んでもらえることが自分の喜びになる」ことを知ったのではないかと思います。

よって、自己満足という点に関しても非常に有意義な活動だったと考えております。



(まちあるきの様子)

6. 反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点としては、先にも書きましたが、①大幅に時間を要したこと、②予算内に費用を抑えられなかったことが挙げられます。

加えて、まちあるきのパンフレットの書き方にも問題がありました。食べ歩きがメイ

ンのまちあるきだったのにも関わらず、あまりに丁寧にしたため、実際に食事するところ
でない店舗もコースとして書いてしまいました。結果、食事しない店舗で食事ができる
と思い込んでいたお客様がいらっしやり、誤解を与えてしまうことになりました。

今後は、役割分担をしっかりと決めて、一人一人が逆算して計画を立て、行動に移せる
ようにしたいと考えております。

7. 実施メンバー

代表者 井上 敬太（経済学部3年）

大谷 素輝（経済学部3年）

構成員 井平 博朗（経済学部3年）

神原 実（経済学部3年）

佐藤 遥菜（経済学部3年）

堤 康平（経済学部3年）

成瀬 裕一（経済学部3年）

二宮 和裕（経済学部3年）

藤本 菜緒（経済学部3年）

山口 華澄（経済学部3年）

山木 詩穂子（経済学部3年）